
十三夜

うすしお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十三夜

【Nコード】

N52530

【作者名】

うすしお

【あらすじ】

十三夜の月をめぐる、ぼくと彼女の1シーン。

今夜が十三夜だというのを知らせてくれたのは、彼女の方からだった。先月、十五夜を見に誘ったのはぼくの方だったのに、当のぼくはそれをすっかり忘れてしまっていた。と言うのも、数日前の、ほんのささいな原因による、すれ違いが二人を遠ざけてしまっていたからだ。ずっとお互い連絡さえ取っていなかった。

十三夜 豆名月とか栗名月だとか呼ばれる秋の名月。必ず十五夜とセットで見なければならぬ、というのが古から続く絶対のルールだ。ぼくらはそのルールに則り、こうして鴨川の河原に腰掛け空を見上げている。気まずさを引きずりながら。

「十三夜はねえ、『拝めば成功がかなう』って言われてるのよ。知ってた？」

彼女が言った。ぼくはさつきコンビニで買った日本酒の小ビンのキヤップをひねりながら「ふうん」と、力なくただ答えた。ぼくはくだらない意地を張っている。それが痛々しいほどに自分でも分かる。知ってか知らずか、彼女はそれを気に掛ける素振りをまるでしない。「ほら」

彼女がお猪口を二つ差し出した。三条商店街のはしっこの陶芸教室に通って作った彼女の処女作。十五夜の晩に初めて見たときは、まるでスマートからは程遠い出来だと思った。無骨で、不恰好。だけど今夜あらためて見てみると、これはこれで味があつていいものだと思える。

酒を注いで、それから小さく乾杯。

「成功に？」

ぼくのその質問は、彼女を困惑させようと発したものだ。ところが彼女は迷いもせず笑顔で答えた。

「もちろん」

目的語のない、そんな言葉を信じられる彼女のオプティミズム。思

えはぼくが惹かれたのは、彼女のそんなところじゃなかったつけ。
彼女の顔を見ているぼくは、口元の笑みをもう隠せなくなっていた。酒に一口つけてから、ぼくは彼女の手を握った。秋の夜の冷えた空気の中、確かに感じる彼女の体温。いくらかの、言葉にならない言葉なら、この体温を伝える鼓動が運んでくれる。ぼくらは会話をぜんぶ、そのつないだ手に任せて、十三夜の月をただ眺めた。

丸太町の駅まで彼女を送る途中も、ぼくはずっと彼女の手を放さなかった。放してしまうのが怖かった。彼女を失くしたら、ぼくは再びあの無味乾燥な生活に戻らなければならない。もともと社交的でもなく、将来に対して希望も持たなかったぼくは、彼女と出会ってからこの半年で、ようやく変わり始めている。彼女の笑顔がぼくの希望で、彼女の不在がぼくの絶望。

月なんて見てしまったせいだ。手を放せば彼女があつた月に帰ってしまうという、ありえない幻想にぼくはとらわれてしまっている。不意にぼくは足を止めて、手で彼女を引き寄せ、力任せに抱きしめた。彼女を逃がしてしまわないように。ぼくの心をバラバラにしまわれないために。このまま、ずっといつまでもこのままです。

腕の中、彼女の息が少し荒くなって、彼女はあえぐようにぼくに言った。

「ちょ、力入れすぎ」

それでぼくは自分がありつたけの力を込めていたことに気付いた。あわてて手を緩めながらぼくは言った。

「ごめん。でも思ふんだ。この気持のうちのどれだけが届いてるんだろうって。壊れるぐらいに抱きしめても、それだけじゃとても足りないって気がする」

この言葉にしたって、いったいどれだけ届くっていうんだろう。彼女の服、皮膚、肉体を通り抜けていちばん深い所まで。そういう意味でなら、もしかしたらぼくはまだ彼女に触れてもいないのかも知れない。怖くて不安でたまらない。

「私の目を見て」

彼女が言った。その少し上目遣いの目をぼくはのぞき込む。彼女は年下のはずなのに、ときどきぼくの姉みたいな顔をする。ぼくはまるで悪戯を咎められた少年みたいに、目を逸らしそうになる。

「私の目に自分が映ってるのが見える？」

まばたきを二、三度してから目を凝らすと、確かにぼくが映っていた。半分泣顔。情けないほどの。

「うん」

「じゃあ、その映っている自分の目の中には私が映っている？」

言われるままにぼくは彼女の目をじつと見つめる。この目の解像度でどこまで追えるか分からない。けれども確かなのは、映っているに違いないってことだ。ぼくは答える。

「きつと」

「分かった？ この合わせ鏡はどこまでも続くの。ずっとずっと、ずっと深くまで。それがどんなに深くても、ちゃんとあなたはそこにいる」

「」

ぼくは無言で再び彼女を抱きしめた。今度はほとんど力を入れていない。でもさつきと違ってはつきりと彼女の心臓の音を感じている。合わせ鏡の無限連鎖。ぼくの中の彼女と、彼女の中のぼく、どこまでも続いて途切れることはない。彼女を抱きしめたままぼくが言おうとした言葉の、先手を取って彼女が言った。

「どういたしまして」

「ありがとう　って、え？」

「何を言おうとしてるか、ちゃんと伝わったから。だから先に言うてみた」

だからぼくらは抱き合ったままで大笑い。ぼくの背中をパタパタと彼女の手が叩いている。ようやくぼくにも彼女の気持ち伝わってきた。ぼくの奥底に語りかけるそれは、いつもの彼女らしい、明るく前向きな言葉だった。

『来年もまた一緒に月見するからね。絶対』

十三夜の月は、満ち足りないままでも完成している。たぶんそういうことなんだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5253o/>

十三夜

2010年10月26日16時22分発行